

革靴の怪

泉鏡花

青空文庫

「そんな事があるものですか。」

「いや、まったくだから変なんです。馬鹿々々しい、何、詰らないと思う後から声がします。」

「声がします。」

「確かに聞えるんです。」

と云った。私たち二人は、その晩、長野の町のあるおおがまえ一大構の旅館の奥の、母屋から板廊下を遠く隔てた離座敷はなれざしきらしい十畳の広間に泊った。

はじめ、停車場ステーションから俵くるまを二台で乗着けた時、帳場の若いものが、
「いらつしやい、どうぞこちらへ。」

で、上靴を穿かせて、つるつるする広い取着的とつつきの二階へ導いたのであるが、そこから、も一ツつかつかと階子段はしごだんを上つて行くので、連の男は一段踏掛あがけながら慌あわただしく云った。

「三階か。」

「へい、四階でございます。」と横に開いて採手をする。

「そいつは堪らんな、下座敷は無いか。——貴方はいかがです。」

途中で見た上阪の中途に、ぼりぼりと月に凍てた廻縁の総硝子。紅色の屋号の電燈が怪しき流星のごとき光を放つ。峰から見透しに高い四階は落着かない。

「私も下が可い。」

「しますると、お気に入りですかどうでございましょうか。ちとその古びておりますので。他には唯今どうも、へい、へい。」

「古くつても構わん。」

とにかく、座敷はあるので、やっと安心したように言った。

人の事は云われないが、連の男も、身体つきから様子、言語、肩の瘠せた処、色沢の悪いのなど、第一、屋財、家財、身上ありたけを詰込んだ、と自ら称える古革靴の、象を胴切りにしたような格別の大きで、しかもぼやけた工合が、どう見ても神経衰弱というのに違いない。

何と……そして、この革靴の中で声がする、と夜中に騒ぎ出したろうではないか。

私は枕を擡げずにはいられなかつた。

時に、当人は、もう蒲団ふとんから摺出ずりだして、茶縹ちやしまに浴衣かきを襲ねまねた寝着ねまきの扮装なりで、ごつごつして、寒さは寒し、もも尻しりになつて、肩かたを怒いからし、腕組うでぐみをして、真四角まっしかく。で、二間けんの——これには掛かけものが掛かけてなかつた——床の間とこを見詰くめている。そこに件くだんの大革靴おおいがあるのである。

白しろぼけた上うへへ、ドス黒くろくて、その身上みみありたけだという、だふりと膨ふくだみを揺ゆつた形かたちが、元もと来き、仔細しさいの無ない事ことはなかつた。

今朝けさ、上野うえのを出でて、田端でんぱ、赤羽あかばね——蕨わらびを過すぎる頃ときから、向むかう側がはに居ゐを占とめた、その男おとこの革靴くわくつが、私わたしの目めにフト氣きになりはじめた。

私は妙な事を思出したのである。

やがて、十八九年じゅうはちじゅうねんも経たつたろう。小児こどもがちと毛けを伸ばした中僧ちゆうそうの頃ときである。……秋あきの招まね魂祭たまげまつりの、それも真昼まっぴるま間ま。両側りょうがはに小屋こやを並ならべた見世みせものの中に、一ひとヶ所ところ目覚めしい看板かんばんを見みた。

血ちだらけ、白粉おしろいだらけ、手足てあし、顔かほだらけ。刺戟せきげきの強つよい色いろを競あつた、夥多あまたの看板かんばんの中なかにも、そのくらい目めを引ひいたのは無なかつたと思う。

続きつづき、上下うへしたにおよそ三四十枚さんじゅうしまい、極彩色ごくさいしきの絵看えかん板ばん、雲うみには銀砂ぎんさ子こ、襖ふすまに黄金きんぱく箔ぱく、引手ひきてに

朱の総ふさを提げるまで手を籠こめた……芝居がかりの五十三次。

岡崎の化猫が、白髪しらの牙きはに血を滴らして、破簾やれみすよりも顔の青い、女を宙に啣くわえた絵の、無慙むぜんさが眼を射る。

二

「さあさあ看板に無い処は木曾もあるよ、木曾街道もあるよ。」

と嗾そそる。……

が、その外には何も言わぬ。並んだ小屋は軒別に、声を振立て、手足を揉もみあげ、躍りかかつて、大砲の音で色花火を撒散まきちらすがごとき鳴物まじりに人を呼ぶのに。

この看板の前にのみ、洋服が一人、羽織袴はおりはかまが一人、真中まんなかに、白襟、空色紋着もんつきの、
 廂ひさし髪がみで瘦せこけた女が一人交まじつて、都合三人の木戸番が、自若として控えて、一言も
 言ものいわず。

ただ、時々……

「さあさあ看板に無い処は木曾もあるよ、木曾街道もあるよ。」

とばかりで、上目でじろりとお立合を見て、默然として澄まし返る。

容体がさも、ものありげで、鶴の一声という趣おもむきもが。き騒いで呼立てない、非凡の見識おのずから顯れて、裡の面白さが思遣られる。

うかうかと入つて見ると、こはいかに、と驚くにさえ張合も何にもない。表飾りの景氣から推せば、場内の広さも、一軒隣のアラビヤ式と銘打った競馬ぐらいはあろうと思うのに、筵むしろがこ 囲ひあわいの廂合の路地へ入つたように狭くるしく薄暗い。

正面を逆に、背後向きに見物を立たせる寸法、舞台、というのが、新筵あらむしろ 二三枚。前に青竹の埒らちを結廻ゆいまわして、その筵の上に、大形の古革靴ただ一個……ひとつ……みまわしても視ながめても、雨あま上りの湿気しけた地つちへ、藁わらの散ちらばつた他ほかに何にも無い。

中へ何を入れたか、だふりとして、ずしりと重量おもみを溢あふまして、筵の上に仇光あだびかりの陰気な光沢つやを持った鼠色のその革靴には、以来、大海鼠おおなまこに手が生えて胸のつへ乗かかる夢を見て驚うなされた。

梅雨期つゆどきのせいか、その時はしとしと皮に潤しめりけ湿しを帯びていたのに、年数も経つたり、今は皺目しわめがえみ割れて乾燥はしやいで、さながら乾物ひものにして保存されたと思うまで、色合、恰かっこ好う、そのままの大革靴を、下にも置かず、やつぱり色の褪あせた鼠の半外套はんがいどうの袖そでに引着

けた、その一人の旅客を認めたのである。

私は熟と視て、——長野泊りで、明日は木曾へ廻ろうと思う、たまさかのこの旅行に、不思議な暗示を与えられたような気がして、なぜか、変な、擦つたい心地がした。

しかも、その中から、怪しげな、不気味な、凄じような、恥かしいような、また謎のよ
うなものを取出して見せられそうな気がしてならぬ。

少くとも、あの、絵看板を畳込んで持つていて、汽車が隧道へ入った、真暗な煙
の裡で、颯と化猫が女を噛む血だらけな緋の袴の、真赤な色を投出しそうに考えられた。
で、どこまで一所になるか、……稀有な、妙な事がはじまりそうで、危つかしい中にも、
内々少からぬ期待を持たせられたのである。

けれども、その男を、年配、風采、あの三人の中の木戸番の一人だの、興行ぬしだの、
手品師だの、祈禱者、山伏だの、……何を間違えた処で、慌てて魔法つかいだの、占
術家だの、また強盗、あるいは殺人犯で、革靴の中へ輪切にした女を油紙に包んで詰込
んでいようの、従つて、探偵などと思つたのでは決してない。

一目見ても知れる、その何省かの官吏である事は。——やがて、知己になつて知れた
が、都合あつて、飛驒の山の中の郵便局へ転任となつて、その任に趣く途中だと云う。――

—それにいささか疑はない。

が、持主でない。その革鞆である。

三

這奴、窓硝子の小春日の日向にしろじろと、光沢を漾わして、怪しく光つて、ト構えた体が、何事をか企謀んでいそうので、その企謀の整うと同時に、驚破事を、仕出来しそうでならなかつたのである。

持主の旅客は、ただ黙々として、俯向いて、街樹に染めた錦葉も見ず、時々、額を敲くかと思うと、両手で熟と頸を圧える。やがて、中折帽を取つて、ごしやごしやと、やや伸びた頭髪を引掻く。巻苘に点じて三分の一を吸うと、半三分の一を瞑目して黙想して過して、はつと心着いたように、火先を斜に目の前へ、ト翳しながら、熟と灰になるまで凝視めて、慌てて、ふツふツと吹落して、後を詰らなそうにポタリと棄てる：…すぐその額を敲く。続いて頸窪を両手で圧える。それを繰返すばかりであるから、これが企謀んだ処で、自分の身の上の事に過ぎぬ。あえて世間をどうしようなぞという野心は

無さそうに見えたのに――

お供の、奴の腰巾着然とした件の革靴の方が、物騒でならないのであった。
果せるかな。

小春風のほかほかとした可い日和の、午前十一時半頃、汽車が高崎に着いた時、彼は向側を立つて来て、弁当を買った。そして折を片手に、しばらく硝子窓に頬杖をついていたが、

「酒、酒。」

と威勢よく呼んだ、その時は先生奮然たる態度で、のぼせるほどな日に、蒼白い顔も、もう酔ったように爛と勢づいて、この日向で、かれこれ爛の出来ているらしい、ペイパの乾いた壇、膚触りも暖そうな二合詰を買って、これを背広の腋へ抱えるがごとくにして席へ戻る、と忙わしく革靴の口に手を掛けた。

私はドキリとして、おかしく時めくように胸が躍った。九段第一、否、皇国一の見世物小屋へ入った、その過般の時のように。

しかし、細目を開けた、大革靴の、それも、わずかに口許ばかりで、彼が取出したのは一冊赤表紙の旅行案内。五十三次、木曾街道に縁のない事はないが。

それを熟と、酒も飲まずに凝視^{みつ}めている。

私も弁当と酒を買った。

私^{おおき}がま
 大な蝦蟇^{がま}とでもあろう事か、革靴の吐出した第一幕が、旅行案内ばかりでは棧敷^{さじき}で飲む
 ような気はしない、が蓋^{けだ}しそれは僭^{せん}上^{じょう}の沙汰で。

「まず、飲もう。」

その気で、席へ腰を掛直すと、口を抜こうとした酒の香より、はッと面^{おもて}を打った、懐しく床しい、留南奇^{とめき}がある。

この高崎では、大分旅客の出入りがあった。

そこそこ、疎^{まぼら}に透^といていた席が、ぎつしりになつて——二等室の事で、云うまでもなく荷物が小児^{こども}よりは厄介に、中には大人ほど幅をしてあちこちに挟^{はさま}つて。勿論、知合になつたあとでは失礼ながら、件の大革靴もその中の数^{うち}の一つではあるが——一人、袴羽織で、山高^{かぶ}を被^かつたのが仕切の板戸に突立^{つた}つているのさえ出来ていた。

私とは、ちょうど正面、かの男と隣合つた、そこへ、艶^{あでやか}麗な女が一人腰を掛けたのである。

待て、ただ艶麗な、と云うとどこか世話でいて、やや婀娜^{あだ}めく。

内端うちわに、品よく、高尚と云おう。
 前挿まえざし、中挿なかざし、鼈甲べつこうの照りの美しい、華奢きゃしゃな姿に重そうなその櫛くしこうがい笄がいに対して
 も、のん気に婀娜だなどと云つてはなるまい。

四

一目見ても知れる、濃い紫の紋もんつぎ着で、白襟ひ、緋なの長襦袢ながじゆばん。水の垂りそうな、しかしその貞淑を思わせる初々しい、高等な高島田に、鼈甲きちんを端正と堅く挿した風采とりなりは、桃の小道を駕籠かごで遣やりたい。嫁ゆめに行こうとする女であつた。……

指ゆびの細く白いのに、紅あかいと、緑なのと、指環ゆびわ二つ嵌はめた手を下に、三指さんついた状さまに、裾すそ模様そもようの松の葉に、玉の折鶴やまがしのように組合せて、棲つまを深く正しく居ても、溢こぼるる裳もすその紅あかを、しめて、踏ふみくぐみの雪の羽はぶたえ二重足袋かすか。幽かすかに震えるような身を緊しめた爪つまさき先の塗駒ぬりこま下駄げた。

まさに嫁がんとする娘の、嬉うれしさと、恥はらいと、心遣こころづかいいと、恐おそ怖れと、涙なみだと、笑えみとは、ただその深く差俯さしうつむ向いて、眉まゆも目も、房かみ々ざしした前髪あらかに隠かくれながら、ほとんど、顔かほのように見えた真向まむかいの島田しまだの鬢びんに包かまれて、簪かんざしの穂あらわにあらわる。……窈窕ようちょうたるかな風采かぜ、花嫁

を祝するにはこの言が可い。

しかり、窈窕たるものであった。

中にも慎ましげに、可憐に、床しく、最惜らしく見えたのは、汽車の動くままに、玉の緒の揺るるよ、と思う、微な元結のゆらめきである。

耳許も清らかに、玉を伸べた頸許の綺麗さ。うらすく紅の且つ媚かしさ。

袖の香も目前に漾う、さしむかいに、余り間近なので、その裏恥かしげに、手も足も緊め悩まされたような風情が、さながら、我がためにのみ、そうするのであるように見て取られて、私はしばらく、壇の口を抜くのを差控えたほどであった。

汽車に連るる、野も、畑も、畑の薄も、薄に交る紅の木の葉も、紫籠めた野末の霧も、霧を刷いた山々も、皆嫁く人の背景であった。迎うるごとく、送るがごとく、窓に燃るがごとく見え初めた妙義の錦葉と、蒼空の雲のちらちらと白いのも、ために、紅、白粉の粧を助けるがごとくであった。

一つ、次の最初の停車場へ着いた時、——下りるものはなかった——私の居た側の、出入り口の窓へ、五ツ六ツ、土地のものらしい鄙めいた男女の顔が押累つて室を覗いた。

累かさなりあふれて、ひよこひよここと瓜うりの転ていがる体ていに、次から次へ、また二ツ三ツ頭かぶが来て、額のどきこで覗のぞ込む。

私の窓にも一つ来た。

と見ると、板戸いたどに凭もたれていた羽織袴うゑひが、

「やあ!」

と耳みみの許とこへ、山高帽やまたかぼうを仰あおむ向けに脱いで、礼をしたのに続いて、四五人一斉に立った。中には、袴はかまらしい風呂敷包ふろしきづみを大な懐中に入れて、茶ちや細つむぎを着た親仁おやじも居たが――揃そろつて車外の立合たちあひに会釈えいせきした、いずれも縁女えんむすめを送つて来た連中らしい。

「あのや、あ、ちよつと御挨拶を。」

とその時まで、肩が痛みはしないかと、見る目も気の毒うづらしいまで身を緊めた裾模様すそもようの紫紺しこん——この方が適当であつた。前には濃い紫と云つたけれども——肩に手を掛けたのは、近頃流行はやる半コオトを幅広よこひろに着た、横よこ肥こりのした五十かっごう恰こう好こう。骨組こつぐみの遅たくましい、この女の足袋たびは、だふついて汚よごれていた……赤ら顔あかこの片目眇めつかちで、その眇めつかちの方をト上へ向けて洗しぶつた薄毛うすげの円鬚まるまげを斜はす向つかいに、頤あごを引曲ひんまげるようにして、嫁御よめおが俯うつむ向けの島田しまだからはじめて、室内しつないを白目沢山あぶで、虻あぶの飛ぶように、じろじろと飛廻みまわしにしていたのが、肥こつ

た膝で立ちざまにそうして声を掛けた。

五

少し揺るゆすようにした。

指に平打ひらうちの黄金きんの太くたく遅おそましいのを嵌はめていた。

肖にも着かぬが、乳母ではない、継ましいなかと見たが、どうも母親に相違あるまい。

白襟しろえりに消えもしそうに、深くさし入れた頤おとがで幽かすかうに領いたのが見えて、手を膝にしたまま、

肩かたが撓しなつて、緞子どんすの帯を胸高にすらりと立つたが、思うに違たがわず、品の可いい、ちと寂しい

が美しい、瞼まぶたに颯さつと色を染めた、薄すすの綿わたに撫な子でしこが咲く。

ト挨拶をしそうにして、赤ら顔に引添つて、前へ出ると、ぐい、と袖を取つて引戻されて、ハツと胸で気を揉もんだ褌つまの崩れに、捌さばいた紅くれ。紅糸べにいとで白つまさきい爪つまさき先を、きしと劃しきつた

ように、そこに駒下駄が留とまつたのである。

南無三寶なむさんぼう！ 私は恥を言おう。露ぬればに濡羽ぬればの鳥が、月の桂かつらを啣くわえたような、鼈べっこう甲てりの照榮てりは

える、目前めのまきの島田の黒髪に、魂を奪われて、あの、その、旅客を忘れた。旅行案内を忘れ

た。いや、大切な件くだんの大革靴を忘れていた。

何と、その革靴の口に、紋もんつき着の女の袖が挟はさまっていたではないか。仕出来しでかした、さればこそはじめた。

私はあえて、この老怪の歯が引ひきくわ啣くわえていたと言おう。……

いま立ちしなの身じろぎに、少し引かれて、ずるずると出たが、女が留まるとともに、床へは落ちもせず、がしやりと据った。

重量おもみが、自然と伝つたわつたろう、靡なびいた袖を、振返つて、横顔で見ながら、女は力なげに、すつともとの座に返つて、

「御免なさいまし。」

と呼吸いきの下で云うと、襟の白さが、颯さつと紫を蔽おおうように、はなじろんで顔をうつむけた。赤ら顔は見免みのがさない。

「お前、どうしたのかねえ。」

かの男はと見ると、ちょうどその順が来たのかどうか、くしゃくしゃと両手で頭髪かみを搔かきしやなぐる、中折帽も床に落ちた、夢中で引ひんむし撈る。

「革靴に挟はさまった。」

「どうしてな。」

と二三人立掛ける。

窓へ、や、えんこらさ、と攀よじ上のぼった若いものがある。

駅夫の長い腕が引ひ払はらった。

笛は、胡桃くるみを割る駒鳥の声のごとく、山野に響く。

汽車は猶たぬら予まわず出た。

一人発奮はつふみをくつて、のめりかかったので、雪頰なだれを打ったが、それも、赤ら顔の手も交まじつて、三四人大革鞆とこりに取かかった。

「これは貴方のですか。」

で、その答も待たずに、口を開けようとするのである。

なかなかもつて、どうして古狸の老武者が、そんな事で行くものか。

「これは堅い、堅い。」

「巖丈な金具じゃええ。」

それ言わぬ事ではない。

「こりや開かぬ、鍵かぎが締かまつてるんじやい。」

と一まず手を引いたのは、茶^{ちやつむぎ} 紬^{おやし}の親仁^{あらかた}で。

成程、と解^よめた風で、皆白けて控えた。更^{あらた}めて、新しく立ちかかったものもあつた。室内^{ことども}は動揺^{どよ}む。嬰兒^{こども}は泣く。汽車^{とじろ}は轟^{とどろ}く。街樹^{なみき}は流るる。

「誰^{そそ}の鹿^{そそ} じやい。」

と赤ら顔はいよいよ赤くなつて、例の白目で、じろり、と一ツずつ、女と、男とを見た。彼は仰^{あおむ}向けに目を瞑^{つぶ}つた。瞼^{まぶた}を掛けて、朱^{そそ}を灌^{そそ}ぐ、——二合^{びん}壺^{びん}は、帽子とともに倒れて
いた——そして、しかと腕^{こまぬ}を拱^{こまぬ}く。

女^{おとが}は頤^{おとが}深く、優^{おとが}らしい眉^{おとが}が前髪^{おとが}に透^{おとが}いて、ただ差^{さし}俯^{うつむ}向^むく。

六

「この次^おで下車^りるのじやに。」

となぜか、わけも知らない娘^{たしな}を駭^{たしな}めるように云つて、片目^{たしな}を男^{たしな}にじろりと向け直して、

「何^{あて}てまあ、馬鹿^{あて}々々しい。」

と当着^{あて}けるように言つた。

が、まだ二人ともなにも言わなかった時、連と目配せをしながら、赤ら顔の継母は更めて、男の前にわざとらしく小腰、——と云つても大きい——を屈めた。

突如、如嚙着き兼ねない劍幕だったのが、ひるがえり、翻つてこの慇懃な態度に出たのは、人は須らく渠等に対して洋服を着るべきである。

赤ら顔は悪く切口上で、

「旦那、どちらの籠か存じましないけれども、で、ございますね。飛んだことでございます。この娘は嫁にやります大切な身体でございます。はい、鍵をお出し下さいまし、鍵をでございますな、旦那。」

声が眉間を射たように、旅客は苦しげに眉を顰めながら、

「鍵はありません。」

「(ご)ぞいませんと?……」

「鍵は棄てました。」

とぶるぶると胸震いをする、翼を開いたように肩で搔縮めた腕組を衝と解いて、一度投出すごとくばかり確と膝頭を掴んで、呼吸が切れそうな咳を続けざまにしたが、決然としてすつくと立つた。

「ちよつと御挨拶を申し上げます、……同室の御婦人、紳士の方々も、失礼ながらお聞取を願うとうございます。私は、ここに隣席においでになる、窈窕たる淑女。」

彼は窈窕たる淑女と云つた。

「この令嬢の袖を、袂をでございます。口へ挟みました旅行革靴の持主であります。挟んだのは、諸君。」

と、す目が空ぎまに天井に上ずつて、

「……申兼ねましたが私です。もつともはじめから、もくろんで致したわけではありません。袂が革靴の中に入っていたのは偶然であつたのです。

退屈まぎれに見ておりました旅行案内を、もとへ突込んで、革靴の口をかしりと啣えさせました時、フト柔かな、滑かな、ふつくりと美しいものを、きしりと縊つて、引緊めたと思う手応がありました。

真白な薄の穂か、窓へ散込んだ錦葉の一葉、散際のまだ血も呼吸も通うのを、引
挟んだのかと思つたのは事実であります。

それが紫に緋を襲ねた、かくのごとく盛粧された片袖の端、……すなわち人間界における天人の羽衣の羽の一枚であつたのです。

諸君、私は謹んで、これなる令嬢の淑徳と貞操を保証いたします。……令嬢は未だかつて一度も私ごときものに、ただ姿さへ御見せなすつた、いや、むしろ見られた事さえお有んなさらない。

東京でも、上野でも、途中でも、日本国において、私がこの令嬢を見ましたのは、今しがた革鞆の口に袖の挟まったのをはじめて心着きましたその瞬間におけるのみなのです。

お見受け申すと、これから結婚の式にお臨みになるようなんです。

いや、ようなんですぐらいだったら、私もかような不埒、不心得、失礼なことはいたさなかつたらうと思います。

確かに御縁着きになる。……双方の御親属に向つて、御縁女の純潔を更めて保証いたします。室内の方々も、願わくはこの令嬢のために保証にお立ちを願いたいのです。

余り唐突な狼藉ですから、何かその縁組について、私のために、意趣遺憾でもお受けになるような前事が有るかとお思われになつては、なおこの上にも身の置き処がありませんから——」

「実に、寸毫すんごうといえども意趣遺恨はありません。けれども、未練と、執着しゅうちやくと、愚癡ぐちと、卑劣と、悪趣と、怨念おんねんと、もつと直截ちよくせつに申せば、狂乱があつたのです。

狂氣きちがいが。」

と吻ほっと息して、……

「汽車の室内で隣合つて一目見た、早やたちまち、次か、二ツ目か、少くともその次の駅では、人妻におなりになる。プラットフォームも婚礼に出迎でむかいの人橋で、直ちに婿君の家の廊下をお渡りなさるんだと思うと、つい知らず我を忘れて、カチリと錠じょうを下おろしました。

乳房ちちうに五寸釘を打たれるように、この御縁女はお驚きになつたらうと存じます。優雅、温お柔じゆうでおいでなさる、心弱い女によしやう性は、さような狼藉にも、人中の身を恥じて、端はしたなく声をお立てにならないのだと存じました。

しかし、ただいま、席をお立ちになつた御容子ごようすを見れば、その時まで何事も御存じではなかつたのが分つて、お心遣いの時間が五分たりとも少なかつた、のみならず、お身体からだの一箇処あかにも紅い点も着かなかつた事を、——實際、錠をおろした途端には、髪ひとすじ一条の根にも血をお出しなすつたらうと思ひました——この祝言を守護する、黄道吉日の手に感謝

します。

けれども、それもただわずかの間で、今の思はどうおいでなさるだろうと御推察申上げるばかりなのです。

自白した罪人はここに居ります。遁も隠れもしませんから、憚りながら、御萱堂とお見受け申します年配の御婦人は、私の前をお離れになつて、お引添いの上。傷心した、かよわい令嬢の、背を抱く御介抱が願いたい。」

一室は悉く目を注いだ、が、淑女は崩折れもせず、柔な棲はずれの、彩ある横縦の微線さえ、ただ美しく玉に刻まれたものようである。

ひとりかの男のみ、堅く突立つて、頬を傾げて、女を見返ることさえ得しない。

赤ら顔も足も動かさなかつた。

「あまつさえ、乱暴とも狼藉とも申しようのない、未練と、執着と、愚癡と、卑劣と、悪趣と、怨念と、なおその上にほとんど狂乱だと申しました。

外ではありません。その革靴の鍵を棄てた事です。私は、この、この窓から遙に異の天に雪を銀線のごとく刺繍した、あの、遠山の頂を望んで投げたのです。……私は目を瞑つた、ほとんど気が狂つたのだとお察しを願いたい。

為業は狂人です、狂人は御覧のごとく、浅間しい人間の区々たる一個の私です。

が、鍵は宇宙が奪いました、これは永遠に捜せますまい。発見せましますまい、決して帰らない、戻りますまい。

小刀こがたなをお持ちの方は革鞆をお破り下さい。力ある方は口を取ってお裂き下さい。それはいかようとも御随意です。

鍵は投棄てました、決心をしたのです。私は皆さんが、たどいかなる手段をもつてお迫りになろうとも、自分でこの革鞆は開けないのです。令嬢の袖は放さないのです。

ただし、この革鞆の中には、私わたくし一身いしんに取つて、大切な書類、器具、物品、軽少にもしろ、あらゆる財産、一切の身代、祖先、父母の位牌いはい。実際、生命と齊ひとしいものを残らず納いれてあるのです。

が、開けない以上は、誓つて、一冊の旅行案内といえども取出さない事を盟約する。小出しの外、旅費もこの中にある、……野宿する覚悟です。

私わたくしは——」
とここで名告なつた。

「年は三十七です。私は逡信省に勤めた小官吏です。この度飛驒の国の山中、一小寒村の郵便局に電信の技手となつて赴任する第一の午前。」

と俯向いて探つて、鉄縁の時計を見た。

「零時四十三分です。この汽車は八分に着く。……」

令嬢の御一行は、次の宿で御下車だと承ります。

駅員に御話しになろうと、巡査にお引渡しになろうと、それはしかし御随意です。

また、同室の方々にも申上げます。御婦人、紳士方が、社会道德の規律に因つて、相当の御制裁を御満足にお加えを願う。それは甘んじて受けます。

いずれも命を致さねばなりません。

それは、しかし厭いません。

が、ただここに、あらゆる罪科、一切の制裁の中に、私が最も苦痛を感じるの、この革靴と、袖と、令嬢とともに、私が連れられて、膝行して当日の婿君の前に参る事です。

絞罪より、斬首より、その極刑をお撰びなさるが宜しい。

途中、田畝道で自殺をしますまでも、私は、しかしながらお従い申さねばなりません。あるいは、革靴をお切りなさるか、お裂きになるか。……すべて、いささかも御斟酌に及びません。

諸君が姑息の慈善心をもって、些少なりとも、ために御斟酌下さろうかと思う、父母も親類も何にもない。

妻女は亡くなりました、それは一昨年です。最愛の妻でした。」

彼は口吃しつつ目瞬した。

「一人の小児も亡くなりました、それはこの夏です。可愛い児でした。」

と云う時、せぐりくる胸や支え兼ねけん、睫を濡らした。

「妻の記念だったのです。二人の白骨もともに、革靴の中にあります。墓も一まとめに持って行くのです。」

感ずる仔細がありまして、私は望んで僻境孤立の、奥山家の電信技手に転任されたのです。この職務は、人間の生活に暗号を与えるのです。一種絶島の燈台守です。

そこにおいて、終生……つまらなく言えば囲炉裡端の火打石です。神聖に云えば靈山における電光です。瞬間に人間の運命を照らす、仙人の黒き符のごとき電信の文字を司ろう

と思うのです。

が、辞令も革靴に封じました。受持の室の扉を開けるにも、鍵がなければなりません。鍵は棄てたんです。

令嬢の袖の奥へ魂は納めました。

誓つて私は革靴を開けない。

御親類の方々、他に御婦人、紳士諸君、御随意に適當の御制裁、御手段が願いたい。

お聴を煩らわしました。——別に申す事はありません。」

彼は、従容として席に復した。が、あまたび額の汗を拭った。汗は氷のごとく冷

たかろう、と私は思わず慄然とした。

室内は寂然した。彼の言は、明晰に、口吃しつつも流暢沈着であった。この独

白に對して、汽車の轟は、一種のオオケストラを聞くがごときものであった。

停車場に着くと、湧返ったその混雑さ。

羽織、袴、白襟、紋着、迎いの人数がずらりと並ぶ、礼服を着た一揆を思え。

時に、継母の取った手段は、極めて平凡な、しかも最上常識的なものであった。

「旦那、この革靴だけ持つて出ますでな。」

「いいえ、貴方。」

判然はつきりした優しい含声ふくみこえで、屹きつと留とどめた女が、八ツ口に手を掛ける、と口を添えて、袖着そでつけの糸をきりきりと裂いた、籠かごめたる心に揺ゆめく黒髪、島田は、黄金たかほりの高彫たかほりした、輝あく斧おののごとくに見えた。

紫むらさの襲かさねの片袖、紋清らかに革靴に落ちて、膚はだを裂いたか、女の片身に、颯さつと流ながるる襦じゆば袢はんの緋鹿ひがのこ子。

プラットフォームで、真黒まつくろに、うようよと多人数に取巻かれた中に、すつくと立って、山が彩る、目瞼まぶたの紅梅。黄金きんを溶とかす炎のごとき妙義山もみじの錦葉もみじに対して、ハツと燃え立つ緋の片袖。二の腕うでに颯さつと翻ひるえつて、雪なす小手こたゑを翳かげしながら、黒煙くろけむりの下したになり行く汽車を遥はるかに見送おくつた。

百合若ゆりわかの矢のあとも、そのかがみよ、と見返る窓に、私は急に胸迫むねおつてなぜか思わず落涙なみだした。

つかつかと進んで、驚いた技手の手を取って握手したのである。
そこで知ちかつ己つぎになつた。

大正三（一九一四）年二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

革靴の怪

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>